

曇鸞と禪觀思想

真 名 子 晃 征

はじめに

中国浄土教の祖とされる曇鸞（四七六―五四二）の思想背景を探究する研究は、これまで主著『往生論註』に顕著に影響が見られる『十住毘婆沙論』『大智度論』といった般若系論書などを中心に進められてきた。しかし、『往生論註』はそれ以外の多種多様な思想が取り込まれることによって形成されている。曇鸞が生きた北魏は、中国仏教史上においてもとりわけ様々な思想が未整理に混在していた。北魏仏教者としての曇鸞の思想を追求していくには、それらを可能な限り拾い上げる作業が不可欠となる。

本論考で具体的に取り上げるのは、曇鸞の意図した実践とは何かという点である。この点に関して、上述の問題意識のもと、北魏仏教界の信仰や実践の状況から「禪觀思想」の影響を想定し、考察を試みたい。それによって、曇鸞像の把握に必要な、新たな視点を提供できればと考える。

一 曇鸞の禪觀に対する関心

曇鸞の禪觀に対する意識は、『往生論註』下巻、起觀生信章（『大正藏』四〇、八三五下）に示される、奢摩他を止、毘婆舍那を觀と訳すことについての以下の記述から読み取れる。

釈奢摩他曰止。止者止心一處不作惡也。此釈名乃不乖大意於義未滿。何以言之。如止心鼻端、亦名為止。不淨觀止貪、慈悲觀止瞋、因緣觀止癡、如是等亦名為止。如人將行不行、亦名為止。是知止語浮漫。不正得奢摩他名也。如椿柘榆柳雖皆名木、若但云木安得榆柳耶？

釈毘婆舍那曰觀。但汎言觀義亦未滿。何以言之。如觀身無常・苦・空・無我・九想等、皆名為觀。亦如上木名不得椿柘也。

傍線部の表現は、鳩摩羅什訳『坐禪三昧經』などに見られるものである。藤堂恭俊氏はそれを僧稠・僧実など当時の禪觀実修者が行った禪觀の実践を取り上げたものとし、これに続く註釈は、五念門所説の止觀の特異性をあらわすためのものと指摘する⁽¹⁾。これに対しては批判的な見解もあるが⁽²⁾、い

れにせよ禅観に意識が向けられていたことは確かである。

二 同時代における禅観の実践

二―一 禅観經典の訳出と禅観の実践

当時の禅観の状況は、禅観經典の内容や、僧伝資料の記録、そして現在残る遺跡などから推測することができる。禅観經典の訳出は、時代を少し遡る五世紀前半に集中しており、曇鸞在世時はそれらが普及していった時代と考えられる。また、僧伝資料を確認すると、『続高僧伝』『習禅篇』には一〇〇人ほどの人物が列伝されているのに加え、他の箇所にも、禅観を修したとする記述を持つ人物は多く、それらを加えると禅観実習者の数はさらに増える⁽³⁾。

以下は禅観実修の動向を探る一端として、僧稠(四八〇―五六〇)と彼がその造営に関わった小南海中窟の事例に注目してみたい。その理由は、彼が『続高僧伝』『習禅篇』の総論(『大正藏』五〇、五九六上)に、菩提達摩と対比して説明されるなど、当時を代表する人物として位置づけられること、また彼の実践した観法に『観無量寿経』の影響が指摘されていることにある。

二―二 僧稠と小南海中窟

『続高僧伝』僧稠伝によれば、河北省に生まれた僧稠は二八歳で出家、様々な師について経論を学び、止観を実践する

が、証するところなく『涅槃經』を読誦した。その後『涅槃經』『聖行品』の四念処法を抛りどころとした。北齊文宣帝(在位五五〇―五五九)の天保二年(五五二)に鄴都に赴き、帝に禅道・菩薩戒法を授け、人々に斎戒を授けたという。

河南省の小南海中窟は、天保元年(五五〇)に造営が開始され、天保六年(五五五)、僧稠の深い関与のもと、造像と浮彫が完成、乾明元年(五六〇)の僧稠死後、窟外に「方法師鑲石班經記」「華嚴經偈讚」「大般涅槃經聖行品」などの石刻文が刻まれる。内部は三壁に三仏が安置され、周囲は全面に浅い浮彫が施されている。注目すべきはその浮彫のなかに、『涅槃經』『梵行品』の偈頌(北壁)と『観無量寿経』に基づく九品往生図(西壁)が近接して存在する点である。

小南海中窟における『涅槃經』『観無量寿経』の結びつきについて、稲本泰生氏は二つの理由を挙げている⁽⁴⁾。

- ・阿闍世王説話を媒介とした、救済の条件とそれが及ぶ範囲の問題に關しての相互補完性

- ・観法の実践体系そのものに内在する相互補完性

このうち、当時の一般的な観法ともいえる四念処法と『観無量寿経』の観法の関係についての二つ目の指摘は、曇鸞の意図した実践の背景を考える上でも示唆を与えるものではないだろうか。

三 『往生論註』成立背景としての禅観思想

このような状況の下、曇鸞は禅観思想をどう捉えていたのか。以下に二つの仮説を立ててみたい。

①曇鸞は「五念門」を「禅観」として理解した

②その媒介として『観無量寿経』が位置づけられる

『往生論註』では、『浄土論』所説の、礼拝・讃嘆・作願・観察・回向の五つからなる五念門を註釈する中、全体を通じて「心心相続」「無他想問雑」といった表現が用いられ、阿弥陀仏を対象とする「念の相続」が強調される。これは『観無量寿経』の「一心繫念」「心不散乱」といった表現と共通するとは考えられないだろうか。また、その観仏思想は、ともに凡夫の行として示されており、その根拠を阿弥陀仏の本願力（宿願力・他力）に求めている。⁽⁵⁾さらに、『往生論註』下巻、観察体相章において「若欲観座、当依観無量寿経」「若欲観仏身、当依観無量寿経」（『大正蔵』四〇、八三九中）と、観察の方法を詳細には説かず、ただ『観無量寿経』によるべきとだけ述べている。

以上のことから、曇鸞の意図した五念門が阿弥陀仏を対象とした禅観であると想定すると、以下のような関係になる。

禅観思想 … 禅観による見仏

←

『観無量寿経』… 阿弥陀仏とその浄土を対象とした

禅観による見仏

←

『往生論註』… 阿弥陀仏とその浄土を対象とした

五念門による見仏（菩提の獲得）

では、三つの関係を右図のように考えることで、先行研究による評価とどのような点で異なる見解が得られるのか。

一つには、五念門中の作願・観察に対する理解である。『鳩摩羅什法師大義』巻中（『大正蔵』四五、一三四中）、『思惟略要法』「観無量寿仏法」（『大正蔵』一五、二九九下）においては、禅観經典に説かれる段階的な観想は、劣った者のための行として示される。五念門中の作願・観察はしばしば高位の菩薩行として理解されてきたが、先の想定が正しければ、それらは階位の低い者を対象とした禅観と考えることも可能である。

もう一つは、称名の位置づけに関する問題である。禅観經典では禅観とともに称名や懺悔について頻繁に言及されるが、それらは禅観の前段階の行として位置づけられる。⁽⁶⁾浄土教における称名思想の嚆矢ともされる曇鸞ではあるが、禅観思想として考えるならば、称名はあくまで禅観の前段階としての位置づけとなる。称名はそれ自体が強調されるべきではなく、観仏から見仏へと続く一連の流れとして理解しなければ

ばならない。

おわりに

本論考では、曇鸞の意図した実践とは何かという点に関して、従来それほど考慮されなかった禅観思想の影響を想定し、考察を試みた。当時の状況について、僧稠と小南海中窟の事例のみしか取り上げられなかったが、その他にも注目すべき禅観実修者は多く確認でき、曇鸞の意図した実践が禅観思想と無関係に成立したとは考えがたい。そこで、『往生論註』に示される五念門釈を禅観思想として理解し、禅観思想を導入する媒介として『観無量寿経』が用いられたのではないかという仮説のもと論を進めた。

五念門釈にみえる「念の相統」の強調は、『観無量寿経』の「一心繫念」「心不散乱」は、ともに阿弥陀仏のみをその対象とする点、低い階位の者であっても見仏が可能となると示す点で共通しており、先の仮説は十分に想定しうると考える。

今回考察に至らなかった『往生論註』と『観無量寿経』の共通点・相異点などについては、別の機会に論じてみたい。

- 1 藤堂恭俊「曇鸞の奢摩他・毘婆舍那観」（福井博士頌寿記念論文集刊行会編『東洋文化論集』、早稲田大学出版部、一九七〇）

曇鸞と禅観思想（真名子）

六九三頁。

- 2 石川琢道『曇鸞浄土教形成論』（法蔵館、二〇〇九）二〇二頁。
- 3 僧伝資料に見られる当時の禅観実修の状況については、武藤明範「『唐高僧伝』にみられる禅観実修の動向（一）」（『愛知学院大学大学院文学研究科 文研会紀要』一六、二〇〇五）などを参照。

- 4 稲本泰生「小南海中窟と滅罪の思想」（『鹿園雜集』四、二〇〇二）。また、曇鸞と僧稠を比較した研究に、内田准心「『往生論註』における願生の意義」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三五、二〇一三）がある。

- 5 『観無量寿経』第十三雜想観（『大正蔵』一一、三四四四中）、『往生論註』下巻、利行満足章（『大正蔵』四〇、八四四上）。

- 6 稲本氏前掲論文、また、小丸真司「『観無量寿経』と称名思想」（平川彰博士古稀記念会編『仏教思想の諸問題』、春秋社、一九八五）、畠部俊秀「『観無量寿経』における称名思想」（『同朋大学論叢』四四・四五、一九八二）などを参照。

〈キーワード〉 曇鸞、僧稠、禅観、『往生論註』、『観無量寿経』
（龍谷大学大学院研究生）